

二次元ぷち文庫

女スパイ

# ソフィア



試し読み版

斐芝嘉和

表紙イラスト：秋月からす

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『女スパイ ソフィア』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



女スパイ

# ソフィア

斐芝嘉和

表紙 / 秋月からす

# 登場人物紹介

Characters

---

## ソフィア

政府の悪事をくじくために追われる身となりながらも、一人で国家と立ち向かう女スパイ。

## アルスー

陸軍の研究施設で作られた新人類。

咽ぶほど濃密な緑の香り、ねっとり湿った漆黒の闇——海の底のような夜のジャングルに、潜む影がひとつ。

女だ。

スラリと長い手足を包み込むのは漆黒のタイトスーツ。爪先から頭の天辺まで一続きになった、ウェットスーツタイプの戦闘服だ。月明かりを吸い込む特殊素材は形よい桃尻や釣鐘型の乳房にぴったりと貼りつき、伸びやかなボディラインを美しく引き締めている。伸縮性に富んだ薄布は、たおやかなうなじから優美な逆卵形の頭部まで完全に包み込んでいた。スツと通った鼻筋やスツキリした頬のラインも黒布に隠れ、端正な横顔は黒曜石で作られた女神像のよう。目元を飾る武骨な暗視ゴーグルも、豊満な胸元から引き締まったウエストまで続くローディングベストのゴツゴツしたシルエットも、黒豹のような精悍さを少しも損ねていない。

(アレね……)

闇を透かしてジツと見つめるのは、狭い谷間にはまり込むように建てられた研究所。高いフェンスに囲まれた敷地の中に、伏せたドミノ牌のように素っ気ない建物が窮屈そうに肩を寄せ合っていた。

陸軍情報部に所属するゲン少佐が、私財を投じて作った秘密の化学兵器研究所——政府の諜報機関は、そう認識していた。隣国との緊張が高まっている現状では有益な研究の

ため、見て見ぬフリをしているのだ。国際問題になるから公式には絶対に認めないだろうが、密かに支援もしているだろう。

だが、女——ソフィアの掴んだ情報は違う。切れ者の少佐は政府の裏を掻き、麻薬密輸と人身売買の拠点にしてしまった。国境にほど近いこの谷間は密貿易に都合よく、しかもうしろめたいところのある政府はちよつかいを出してこない。私腹を肥やすには絶好の機会というわけだ。

(そうはさせないわよ)

茂みに潜んだ影は胸の内で呟く。手慣れた手つきで装備を確認、頭の中には暗記した地図を思い浮かべ、机上訓練をなぞる。

ソフィアは数年前まで、統括幕僚本部直轄の諜報局に所属する女スパイだった。表向きは職業にファッションモデルを選ぶほどの美貌を持つ、敵地潜入と破壊工作に長けた荒事専門のエキスパート。己の正義感に突き動かされて政府要人とマフィアとの癒着を独断で公にしてしまったため、いまは追われる身である。

ただ逃げているだけではない。エージェント時代に作った人脈と高い技量を活かし、政府絡みの悪事を暴いたり裁いたり——義賊的な活動を精力的に行っていた。

賄賂と暴力が横行する政情を改善すれば己の身が安全になるし、なにより不当な権力行使に泣かされている人々を助けることができる。フリーの工作員となった女スパイは、自

らを正義の剣とし、国の歪みを正そうとしているのだ。

研究所の門を守っているのは、近くの村から雇ったらしいゴロツキだった。軽機関銃を肩に提げているが、暗視ゴーグルは額に載せ、怠そうに立っている。

(門番しているっていう自覚がないのかしらね)

半ば呆れつつ、ベルトのバックルに突き出たスイッチを入れた。

ウン——。

微かなハム音が薄闇に響くと同時、ソフィアが消えていく。伸びやかな肢体を包み込んだ特殊素材が周囲の光景を映し出し、ボディラインを隠したのだ。柔肌から放射される体温も吸熱素子に蓄積され、赤外線放射量も抑制される。人脈を辿って入手した、最新式の熱光学迷彩服だ。

肉眼はもちろん、赤外線センサーや暗視ゴーグルからも不可視となり、生い茂る下草に触れないよう注意しながら動き出す。足音を立てないように門に近づき、大胆にも男たちの目の前を通り抜けて——トン！

筋電圧に反応する特殊素材が瞬間的に跳躍力を増幅し、見えない身体が矢のように跳ね上がった。高い門扉の遙か上を飛び越え、クルリと身を捻って内側に着地。質量感知センサーが仕込まれているはずのフェンス際は避け、深い轍に沿って奥へ進む。

無造作に積み上げられた資材の影を伝い、ふたり一組で巡回している男たちのあとをつ

けて、目指すは敷地の真ん中に立つ一番大きな建物。仲間の調査で、「商品」の少女たちはその地下に監禁されていることまで分かっていた。

目的の建物に到着したソフィアは、扉を避けて裏手に回った。腋に提げたホルスターからワイヤーガンを取り出し、屋上へ向けて――。

ばしゅん！

ネズミの咳ほどの音を立てて、超剛性ワイヤーが放たれた。尖端のフックが壁に突き刺さり、ピンを張る鋼線。伝って屋上へあがると、目の前に現われたのはL字を逆さにしたような換気ダクト。暗記した地図の通りだ。身の丈ほどもある開口部には目の粗い金網が張つてあるだけで、警報器やトラップの類はひとつもない。ワイヤーカッターでフェンスを破り、ダクトの中へ。

轟々とファンの音が鳴り響く真つ暗な縦坑をワイヤーにぶら下がって降りていく。途中に現われる横穴は各階の天井を這う支管。擬装用の地上階に用はない、少女たちが閉じこめられているはずの地下へ――まっすぐに降りていくと。

あ……ああん……イヤ、やめて……。

規則正しくうねる轟音に混じって、猫に似た声が聞こえてきた。甘く切なく、悩ましい悲鳴。下品な笑い声も聞こえる。監禁された少女が、男たちに犯されているのか。

降るにつれて、痛ましい声はハッキリ聞こえるようになった。肉がぶつかり合う生々し



い音も。

「あっ!? あああ、あんあんううっ！」

波打つ鳴咽。切迫したリズムに獣のような唸り声が同期して、それを男たちが笑う。

「もっとゆっくりしてやれよ。それじゃあ感じるヒマもねえだろ」

「へ、へへ、孔が締まって、具合が、いい、んだ、よ！」

息を荒げた男が唸ると、少女が掠れた悲鳴をあげた。パンパン、と小気味よく響いたのは、頬を平手打ちされた音か。

（なんて非道いことを……っ！）

縦坑の底に達したソフィアは焦る気持ちを抑えて足元を手探りし、点検用のハッチを見つけた。薄いブリキの蓋をソツと開け、暗視ゴーグルのレンズにファイバースコープを接続して覗き込むと――。

まず見えたのは、荒々しく動く大きな背中。迷彩戦闘服を着た男が、床に蹲り、しきりに腰を動かしている。男の太い腰には硝子細工のように華奢な脚が絡みついていて、透き通るほど白い肌、玩具のように小さな足指。戦闘服の首筋にしがみついた細い腕、床に広がった艶やかな黒髪――間違いない。男の身体にすっぽり隠れてしまうほど小柄な少女が、強姦されているのだ。

（待っていて、いま助けるから！）

め回した。双球に膨れ上がる甘やかな感覚。ブラジャーの下へ潜り込んだスライムが乳先へ這い登り、ぷっくり膨れた肉豆に冷たい擬肢を絡みつかせる。

「くはっ!? あん!? うううっ!」

恥裂に炸裂する鮮烈な快美感。肉莢に半ば埋もれて密かに痲つていたクリトリスが、細かく震える触手に捉えられたのだ。左右の乳首と股間の淫核、みつつの快感極点の間に強烈な電流が行き交い、X字に引き伸ばされた女スパイが見えない鞭に打たれているように激しく悶え狂う。

にゅちゅちゅ、ぎゅちち。

捻れた身体のおちこちに、湿った音が立った。肌にピッチリ貼りついた布地の裏で冷たい粘液が流動し、火照る女体を愛おしそうに舐め回す。

「くうう……く、そ、うう!」

氷のような感覚が、蒸れた柔肌に気持ちよかった。呻く声が悩ましく裏返り、はしたなく波打ってしまう。肉悦を産みつけるぬめりから逃れようと藻掻けば藻掻くほど、タイトスーツの裏側に広がった粘液がヌルヌルと滑り、全身が力強く愛撫される。揉みくちやにされた柔肉が煮え立ち、骨の髄まで蕩けてしまいそう。

「あと五分。我慢できるかしら?」

意地悪く笑ったアルスが、ほかの少女たちに混じって手を伸ばした。白い細指が狙う

のは、ソフィアの恥部。

「や、やめ……あんっ!!」

くじゅうっ!

白い細指が、黒布に浮かぶ割れ目を押し歪めた。淫唇に絡みついたスライムが流動し、激しく舐め回される粘膜器官。蠢く粘液は膣口に冷たいぬめりを擦りつけつつ、細かく震えながら淫穴の中へ流れ込む。

(な……ふ、膨ら、むっ!!)

胎内に潜り込んだ冷たい塊が、ムク、ムク、と膨らみ始めた。牝蜜が餌だというスライムが、膣膜に滲んだ粘液を吸って増殖しているのだ。

「くうう、ああ、ううう……っ!」

細かく枝分かれしたヌルヌルが肉孔の中を泳ぎ回る。何千匹ものミミズの群が出口を求めて暴れているような感覚。細かな膣襞がピチピチ弾かれ、悦びが弾けた。粘膜の溝には小刻みにくねる触手がはまりこみ、滲む蜜を吸い立てて快感を刻み込む。

(ああ、ダメ、うごい、ちゃ、うううっ!)

股間に閃く火花に操られ、身体が鋭く捻れた。右へ左へ、クン！　クン！　とスイングする腰。

ゆさぬちゅ、ゆさぬちゅ……激しく揺すれる胸元で卑猥な音が鳴ると、双球が蕩けるほ

どに熱くなつた。裏地に染み込んだスライムが繊細な乳肌をビチャビチャ舐め回し、黒い布地が肉釣鐘を締め上げて、まるで大きな手に驚掴みにされて激しく愛撫されているような——乳谷は汗と粘液に潤み、せめぎ合う柔肉が互いを揉み合つて淫熱を高め合う。

「もうイキそう？ だらしないのね、山猫さん」

「くっ！ これくらい、どうつて、こと……ううう……っ！」

ぷっくり膨れた唇を噛み、耳の先まで赤らんだ顔を振つて懸命に否定するのに。

「みんな、聞いた？ もつと激しくしていいんですって」

アルスの言葉を受けて、群がった少女たちが歓声を上げた。悶えるソフィアの尻に、乳房に、白い手が殺到する。

「ああっ！ や、やめ……く、ああ、あああッ!!」

冷たいぬめりに舐め回され、吸い立てられる乳肌。ブラのカップにめり込んだ乳首が絡みつく薄布にキュウツと抓られ、胸先に電撃が弾けた。

桃尻に貼りついた細指が張り詰めた黒布をムニムニ揉み込むと、タイトスーツの裏地に染み込んだスライムが尻肌を舐め回す。排泄孔に潜り込んだ擬肢も激しく震え、直腸粘膜に冷たい悦びを産みつける。

「くはっ！ ふ、くううっ！」

滲む腸液を牝蜜と誤解したのか、流動生物が肉蕾をこじ開け、グリグリと潜り込んでき

た。まるで氷柱をねじ込まれているよう。

冷たい塊は恥部にもあった。秘華に貼りついたスライムがヴヴン！ と震え、ウズラの卵くらのコブを作る。指先ほどの硬さの膨らみは、膣孔に潜り込んだ擬肢を伝い、肉孔の中へ――。

「あう……う、ンあつ！」

コリッ！ コリッ！ コリッ！

数珠繋ぎになった氷の玉が、壺口をしごきながら次々と胎内へ。

「ああダメっ！ い、やあつ！」

閃く快感に弾かれて、腰がカクンカクンと前後する。見えないペニスに犯され、激しく突きまわられていているような――爆発する羞恥。全身がカアツと熱くなった。

恥ずかしい動きを止めようと必死に身体を捻ると、

――ぎゅちち、にゅち！

括約筋が緊縮し、前後の肉孔に充滿したスライムを締め上げる。

「うっ!? あ、あああつ!？」

重圧に対抗するように、冷たいヌルヌルの動きが激しくなった。尻孔を占拠した触手は流動する体側に小さなイボを何十、何百も生やし、直腸粘膜を揉み立てる。蜜壺に潜り込んだ粘液はさらに細かく枝分かれして、プクツと膨れた膣壁を啄み抓りキュッキュとしご

き、細かく震えて激感を生む。

「ああん、お姉様つたらいやらしい声！ 私までおかしくなっちゃうん！」

女スパイを取り囲んだ少女たちが、巫山戯た声をあげながら身体を擦り寄せた。悶える美脚に細い脚を絡めてしがみつきの、桃の実のような尻に頬摺りする。背に貼りついた少女は自らの小さな乳房を押しつけながら腕を前へと回し、ゆさゆさ踊る乳房を支えるように掴んでキュッキュツと揉みあげる。

（ああ、そんな、そんな……っ！）

薄い黒布の上から、肢体を揉み込む少女たちの柔肉。熱烈な愛撫を受けた太腿は骨まで蕩けてしまいそうなくらい気持ちよく、頬を擦りつけられた尻房には甘美な感覚が充満する。くびれたウエストは絡みついた細い腕に締め上げられ、服の裏地に染み込んだ冷たいぬめりをニュチニュチ塗り込まれて、腹の中まで心地よくなってしまおう。

「いきそう？ ねえ、応えてよソフィアさん。いきそうなんでしょう？」

恥部に貼りついたアルスーの手が、黒布に浮き上がる割れ目を小刻みに擦り上げた。微弱な振動がスライムを伝い、淫穴の中まで響いてくる。

「あうっ！ ふ、くあ、ふは……うく!? な、なに、なにに、なんなの……ひあ!?」

肉芯に炸裂する、一際強い感覚。

膣奥に突き出た子宮口周囲の肉瘤に、冷たい粘液の塊が貼りついてきたのだ。ポルチオ

性感帯、女体にしか存在しない秘密の極点。

「はひっ!! きふ……あっ!! あっ! あああ、ああ、ああ、あっあああっ!!」

鮮烈な激感が、何度も何度も閃いた。腹の底を氷の唇でぶちゅぶちゅ吸い立てられ、しなやかにくねる舌で滅茶苦茶に舐め回されているような――。

「だ、ダメ、ダメダメ、やめてええええええええええっ!」

背を駆け上がる快感の津波。

肉孔の奥底を責め立てているモノは氷のように冷たいのに、身体の芯に湧き上がるのは炎の柱。メラメラ踊る火の穂の先が脳芯を炙り、理性が煮え蕩けてしまう。

「やめ、ダメ、あああつ! うう、ああ、くううっ!」

内と外から刻み込まれた快感が、女体の中で混じり合いひとつの大きなうねりとなった。抗えない、逆らえない。巨乳を振り立て尻を揺らし、アルスの白い手に恥部を擦りつけるようにカクンカクンと腰をしゃくって――少女たちに群がられた身体が、狂ったように悶えまくる。

「この程度でイッちゃうの? だらしないのね、スパイのクセに」

黒髪の少女に嘲笑われても、止まれなかった。柔肌をピッチリ締め上げるタイトスーツの中で冷たい粘液が流動し、動けば動くほど全身が揉みまくられて気持ちよくなってしまう。昂奮する女体に応えたスライムは振動を強め、蜜壺や排泄器官をぐちゅぐちゅにちゃ

我慢できない。

男の手に桃尻を抱えられるより先に、グイッと恥部を突き出す女スパイ。雄々しくそぞり勃った肉棒に淫華を被せ、

「はうっ！ う、うううッ!!」

はしたない声を張り上げながら腰を沈めていく。

ぬちゅ、ぐちゅうう！

龟头に磨り潰された粘膜ピラが、卑猥な音を立てて歪んだ。淫唇に染み込む男根の熱。指よりもずつと太い肉棒がトロトロに蕩けた壺口をこじ開けると、

「にあ、ひ、ああっ！」

牡肉を感じた女陰に心地よい電流が渦巻く。

「おおっ！ 中までぐちよぐちよじゃねえか！」

悦びの声をあげた男が、ソフィアの尻を抱えてグン！ と腰を突き上げた。

ぐぶじゅじゅじゅじゅッ!!

いきり立つ剛直が、淫らに熟した肉孔を一気に貫く。

「あひいっ！」

男根に磨り潰された膣粘膜がカアツと燃えた。弾ける悦び。ビクン、と痙攣した脚が、テーブルを蹴り倒す。





支えを失った尻が落ち、肉孔にはまり込んだ肉棒がさらに奥まで挿し込まれた。硬い切っ先が膣奥を叩き、肉芯に刻み込まれる激感。

「はうんっ！」

男の首にぶら下がり、舞い上がるように伸び上がれば、ズルッと動く淫茎が膣口を擦り上げ、勇ましく張り出したエラが細かな粘膜襞を磨り潰す。肉孔の奥に炸裂した激感とは違い、蕩けるような淫悦。しがみついた腕から力が抜けて、再び身体がずり落ちる。

「ふあひっ!? あひっ!? あああっ!!」

硬い戦闘服に胸乳を擦りつけ、男の腰に脚を巻きつけて、上下に跳ね動く女スパイ。男根に貫かれた淫穴がグポグポ鳴り、肉棹に絡みついた粘膜がいやらしく捲れ返る。掻き出される牝蜜。

「おうおう、自分で動くぞ、この女」

甘酸っぱい匂いに誘われて、男たちが身体を寄せた。細紐に搾り出された尻肉を撫で回し、揺れる髪に鼻を埋めて、汗ばんだうなじを舐めまくる。

ビーン！ ビーンッ！

男と擦れた場所に炸裂する激感。

弾かれた女スパイは長い髪を振り乱し、さらに激しく身悶える。

むにゆりむにゆりむにゆり、と歪む乳房に淫悦が膨れ上がった。痾り勃った乳首が戦闘

服に擦れ、突き刺さる快悦。

（あっ!! ぬ、抜け、る……っ!!）

跳ね踊る尻の真ん中で、排泄孔を貫いた玩具が動く。ぬめりに滑った淫棒が、波打つ直腸に圧されて抜け出してきたのだ。ズズ、ズズ、としごかれる菊蕾。湧き上がる肛悦が膣孔の快感と混じり合い、甘美な高波となってソフィアの背を押し上げる。

「はうう、あううう、くあううう——っ！」

——ぷるんッ！

肛門から勢いよく飛び出す淫棒。

ヌラヌラと紅い腸膜が捲れ返り、薄く色づいた粘液が吹き出した。

「なんだ？ こっちの孔にも挿入れて欲しいのか？」

揺れる背に、ニヤけた男が抱きつく。

「うう、ううう……くあっ!! ああ、ダメ、そっちは……ああっ！」

肛門に押し当てられる熱い塊。赤々と輝く鎌首が、咲きこぼれた肉薔薇の花芯に鼻先を埋めたのだ。

「こんなに柔らかくなっていて、ダメってコトはないだろう？」

いやらしく笑った男が、ソフィアの身体に腕を巻きつけながらグイッと腰をしゃくった。ズズンッ！

猛った剛直が肉孔を貫き、直腸粘膜を激しくしごく。

「きあひいいッ！」

炸裂する電撃。

二本のペニスに挟まれた肉膜が、ギユウつと磨り潰されたのだ。淫茎の緩い捻れが腹の中を搔き回し、括約筋を揉み解す。

膣と直腸、前後の双穴に燃え上がる悦びの炎。メラメラ踊る火の穂に炙られた女スパイは、男たちの胸の間で悶え狂う。

「へへへ、感じまくってやがる。ヌルヌルしたのが絡みついてくるぞ」

嬉しそうに笑った男たちが、跳ね踊るソフィアを抱えて腰を降ろした。低くなった顔の左右に、グツと突きつけられるいくつものペニス。

「ふあ、あ、あああ……っ！」

鮮烈な精臭が鼻を突く。草いきれに似た芳香に、脳芯が痺れた。欲しい——ヘソの下が熱くなる。女性の欲望を司る子宮が、濃密な白濁液を求めてグツグツ沸騰したのだ。

熟した苺のように輝く龟头が、美味そうに見えた。喉が渴き、口の中に唾液が溢れる。紅い唇が開き、鼻先で揺れる龟头に近づいて——。

ぶちゅ！

激しい音を立ててむしゃぶりついた。

(ああっ！)

牡肉に触れた唇がたちまち気持ちよくなる。淫悦に冒された女体は、あらゆる粘膜穴が淫穴になっていた。もっともっと感じたくなつたソフィアは、たくましい肉棒に舌を巻きつけ、自ら顔突き出して深々と啜え込む。

「やらしい女だな。そら、こつちにもあるぞ」

手に押しつけられる熱い塊。キュウツと曲がる細指が、怒張ペニスに絡みつく。

(か、硬いっ！)

指を押し返す弾力がたのもしかった。じつとりと汗ばんだ掌は膣穴のように敏感で、肉棹のコリコリした感触だけで骨まで蕩けてしまいそう。

「しごくんだよ」

手首を掴まれ、やり方を教えられた。

「むあっ!? む、うむううっ！」

男根の緩い捻れに揉み込まれる掌。湧き上がる悦びに、ペニスを啜えた口から涎を飛ばし、悶え狂う女スパイ。気持ちよくなる方法を知った細腕が羽ばたくように激しく動き、握り締めた肉棒をシュッシュッとしごきたてた。

ぐぼ！ ぐちゅ！ ぐぼ！ ぐちゅ！

跳ね踊る尻の下では、剛直に貫かれた双穴がいやらしい音を響かせる。肉コブに突き上

げられた膣奥に熱いモノが炸裂し、弾かれたように伸び上がれば、

ぐぼぽっ！

口に唾えた男根が喉の奥まで潜り込み、磨り潰された咽喉蓋に激感が閃く。

「んむあっ！ むあ、んああっ！」

淫棒に犯されたみつつの穴、肉棹を握り締めた掌——悦びを刻み込まれるのは、それだけではない。グリグリと頬に擦りつけられる亀頭、汗ばんだ耳裏を舐め回す熱い舌。腋下から胸へと伸びた手が、重々しく揺れる乳房を掴み、ギユウツと握り潰せば、双球にも肉悦が爆発する。

（ああ、あああ、飛ぶ飛ぶ、飛んじやううっ！）

身体のうちここに湧き上がった高波が、淫らにくねる背に渦巻き、ひとつの大きなうねりとなった。荒波に揉まれる木の葉のように悶え狂い、泣き叫んでますます激しく跳ね踊るソフィア。

膣、肛門、舌、掌——女体に触れた牡肉が、ムク、ムク、と蠢いた。たくましい弾力がさらに増し、肉芯に熱いモノが充満する。

射精の予感。

「ふあ、ふあうえええっ！ ふあえ、ふあえふあえええっ！」

ペニスを唾えた口から涎とともに春声をこぼし、ソフィアはさらに昂った。脛の裏に白

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**